

## 唯物史観と範疇模写説

### —ヘーゲル・マルクスと宇野弘蔵の方法論を繋ぐミッシング・リンク—

新 田 滋

#### はじめに

いわゆる唯物史観は、社会主義的な変革の必然性を予見として立てていたために、社会主義イデオロギーによるものという偏見がひろく共有されてきた。しかしながら、その部分は、マルクスが19世紀中葉において近い将来に起こりうることについて立てた予測としての仮説にすぎないのであり、それは科学的な仮説の一つとして、すでに反証、棄却された部分としてとらえられるべきであろう。

そもそも、マルクスは、「ほくについていえば、近代社会における諸階級の存在やその階級間の闘争を発見したという功績は、ほくのものではない」と述べ、「ほくが新たになしたことは、一、階級の存在は生産の特定の歴史的発展段階に結ばれているにすぎないこと、二、階級闘争は必然的にプロレタリア階級の独裁に導くこと、三、この独裁それ自身はいっさいの階級の廃止への、階級のない社会への過渡をなすにすぎないことを証明したことである」（マルクスのヴァイデマイアー宛書簡、1852年3月5日付け。『マルクス・エンゲルス全集』大月書店、第28巻、407頁。ただし、訳は新潮社『選集』版による）としていた。

ここにみられるように、プロレタリア独裁と階級廃絶への予見という、のちに社会主義イデオロギーと目されることになる予測仮説の部分だけを、マルクス自身はみずからの独創と考え

ていたわけである。

したがって、本稿で問題とする唯物史観は、あくまでも社会主義イデオロギーとは相互独立的な、歴史科学のための準備仮説として了解されるべきものである。

その上で、唯物史観の公式そのものは、種々指摘されてきたように様々な再構成を必要とする。とりわけ、唯物史観に対して意識、観念、イデオロギー、想像、幻想の契機を総合しようとしてきた営みは枚挙にいとまがない（マックス・ヴェーバーによる批判に始まり、それを受け止めるかたちでグラムシのヘゲモニー論、アルチュセールのイデオロギー論、吉本隆明の共同幻想論、ベネディクト・アンダーソンの想像の共同体論を始めとして、20世紀の新マルクス学派ともいうべき多彩な展開がなされてきた）\*1。

だが、そうした本題ともいうべき課題に入るためにも、そもそも唯物史観の諸範疇はどのような論理的手続きをもって根拠づけられるものなのかを、改めて再検討する必要がある。そのことをつうじて、いままで積み重ねられてきた意識、観念、イデオロギー、想像、幻想といった契機を総合する試みが、他方で、それとはまったく無関係のようにして宇野学派によって精緻に組み上げられてきた経済学の体系的な諸成果と、論理的な有機性をもって関連づけることも可能となるであろう。

本稿は、新マルクス学派の多彩な展開と宇

野学派の精緻な経済学研究の両者を連結し、社会科学の全体系性を再構築するために必要な、見失われていた環 missing link を見出す試みである。

## 第 1 節 唯物史観と方法模写説

### 第 1 項 唯物史観の論理的根拠

いわゆる唯物史観の公式は『ドイツ・イデオロギー』、『哲学の貧困』、『賃労働と資本』、『経済学批判序論』等において、あたかも託宣のようにいささか唐突なかたちで提示されて以降、第二インター期、第三インター期をへて、最終的にはスターリン [1938 年] 『弁証法的唯物論と史的唯物論』(石堂清倫訳、『弁証法的唯物論と史的唯物論 他二篇』国民文庫、1953 年、所収) へと公式化されていった。

また、アルチュセールは、唯物史観が歴史科学の発見という「認識論的切断」をなしたことを強調するあまり、その「認識論的切断」がどこから由来するのかという形成史的過程も、また、唯物史観の諸範疇を導出する論理的手続き論もまったく無視していた。そこでは、ただただ天才的直観による「認識論的切断」が強調されるばかりとなる<sup>\*2</sup>。

それでは、実際のところ、『ドイツ・イデオロギー』においては、どのような論理的手続きによって唯物史観とその諸範疇が導き出されていたのであろうか。

『ドイツ・イデオロギー』第一部(清書稿)において、マルクス、エンゲルスは自分たちの方法を、「現実的前提」から出発するものであるとし、その前提を、「一定の諸条件のもとで、現実的で経験的に観察しうる発展過程にある人間たち」としている。

提のものではない。それは現実的な諸前提から出発し、ひとときもそれをはなれない。その前提とは、人間たち、なにか空想的な閉鎖性と固定性ではなくて、特定の諸条件のもとで、現実的で経験的に観察しうる発展過程にある人間たちである。」(花崎皋平訳『ドイツ・イデオロギー』による。なお、廣松渉/小林昌人編訳による岩波文庫版では 32 頁。)

さらに、これにすぐ続けて、

「[43 頁] この活動的な生活過程が開示されるやいなや、歴史は、かれら自身がまだ抽象的な経験論者たちにおけるような、死んだ事実の山とか、観念論者たちにおけるような、想像上でつくられた主体の想像上の活動であることをやめる。」(同前)

「[43 頁] こうして思弁がおわるころ、すなわち現実的な生活のもとで、現実的で実際的な科学、人間たちの実践的活動と実践的發展過程の解明がはじまる。意識に関するおしゃべりがやみ、現実的な知識がとってかわらねばならない。自立的な哲学は、現実の解明がはじまると飯の種をうばわれる。せいぜいよくても、人間たちの歴史的発展の考察から抽出されるきわめて一般的な諸成果の総括がそれにかわりうるにすぎない。これら諸抽象物 (die Abstraktionen) は、現実の歴史から切りはなされれば、それ自身ではまったくなんの価値ももたない。それらは、歴史的資料の整理をかんたんにし、そ [44 頁] れの各層の配列順をしめすためにだけ役立ちうるにすぎない。」

「[43 頁] このような考察の仕方は、無前

として、「活動的な生活過程が開示される」ことをもって、経験論と観念論を同時に乗り越え

る方法であると高らかに宣言し、みずからの立場を「人間たちの実践的活動と実践的發展過程の解明」たる「現実的で実際的な科学」として

いる。  
だがしかし、多様で流動的な「人間たちの実践的活動と実践的發展過程の解明」たる「現実的で実際的な科学」を把握する方法とは、具体的にはどのようなものなのであろうか。彼らは、ヘーゲル学派的な観念論のような「自立的な哲学」を否定し、「現実的知識」によってそれにせまろうとする\*3。

だが、ここにはいまだ大きな課題が伏在しているといわなければならない。ここで見逃してはならないことは、その「現実的知識」なるものは、「経験論者たち……におけるような死んだ事実の山」ではないのだといわれているものの、それが一体どのような意味で経験論と異なるのかが一向に明示されてはいないということである。

マルクス、エンゲルスは序論の最後の部分において、

「[44頁] われわれはここで、われわれがイデオロギーの代わりに用いようとする上記の諸抽象物の若干をとりだして、それらを歴史的な事例によって説明してみよう。」

といて本論における唯物史観の叙述へと移行してしまっているように、もっぱらドイツの観念論者たち＝ドイツ・イデオロギーへの批判に集中していく。そのため、歴史を「死んだ事実の山」としかみない「かれら自身がまだ抽象的な経験論者たち」への批判は素通りされる結果となっているのである。

このように、『ドイツ・イデオロギー』においては、たんなる経験論的な事実の単なる寄せ集めという方法は批判されている。だが、それ

に対して、マルクス、エンゲルスがみずから対置する諸範疇は、たんに歴史的観察からの諸抽象物だというだけであった。そのため、それが経験論的な帰納法とどう異なるのかは、一向に明らかではないといわざるをえない。

経験論、実証主義の方法というものは、素材となる対象の下向的分析に終始し、それがなんらかの先行的な粗い概念的把握を潜在的に前提していることを看過しているという特徴をもっている。つまり、経験論、実証主義の方法は、たんなる事実の寄せ集めをつうじて分析的、帰納法的に分類範疇を作業仮説として作り出し、次に、その作業仮説をさらなる事実のデータと突き合わせて検証する作業を繰り返す。この範囲に完全にとどまっていることにその決定的な特徴がある。

だがしかし、じつは、素材となる対象の下向的分析なるものも、それがどんなに粗雑なものであれ、なんらかの潜在的に先行する上向的综合による概念的把握を前提しているものなのである。そこまではヘーゲル哲学にもとづく知識によって誰でも指摘することはできる。だが、マルクス、エンゲルスとしては、なんらかの潜在的に先行する上向的综合による概念的把握が、どのような論理的手続きによるものであるかを具体的に明示できなければ、みずからの「現実的知識」とするものと、経験論的な帰納法による知識との相違を示すことはできない。かえって、「死んだ事実の山」に直観的な託宣による諸抽象物、諸範疇を恣意的に付け加えることにしかならないのである。

つまり、マルクス、エンゲルスはここで、たんに託宣のようにただ直観的に「人間たちの歴史的発展の考察から抽出されるきわめて一般的な諸成果の総括」を持ち出してきているにすぎない。その背後にどのような論理的手続きの過程があるのかは不明なままだったのである。

この点については、じつは、すでにアルチュセール派に属するバリバルが、『資本論を読む』所収の論文において次のように指摘していたところでもあった。

「[19頁] 「生産様式」を中心概念とする」マルクスの理論は、それがその科学的認識を創始する歴史自体を不断の対象にすると同時に、それ自体に即して考察されたこの歴史の適切な概念をどこにも与えていない、という逆説をあらわにしている。」

「[19頁] 例えば、『ドイツ・イデオロギー』の最初の部分……、『経済学批判』の「序文」……、『経済学批判要綱』のなかに集められた多様な『資本論』準備草稿など[20頁]がある。……これらのテキストでは、区分の明瞭さ、主張の断固たる調子と拮抗するかのよう、弁明の簡潔さ、定義の省略が見られる。……歴史理論の原理に関する論考だけがこの種のものであり、しかもその大部分は故意に未完の草稿のままに残され、公表されないでいた。」

「[30頁] すなわち、マルクスはこのレベルでは自分の特殊な答えを正当化することはできないし、事実それは正当化できないものであって、だからこそ、われわれが語っているテキストはおそらくはドグマティックな簡潔さをもっているのであろう。」(Balibar, [1965])

つまり、バリバルは「生産様式」を中心概念とする唯物史観の諸範疇は、『経済学批判序論』のように断片的か、『ドイツ・イデオロギー』、『経済学批判要綱』などのように未完の草稿のままに残され公表されないでいたテキスト群において、定義の省略されたドグマティックな簡潔さをもった説明しか与えられていないと

指摘していたわけである。

しかし、そこでのバリバルの問題意識そのものは、マルクスにおける「認識論的切断」によってもたらされた「生産様式」を中心とする諸概念を、『資本論』の“徴候的読解”にもとづいて、経済学的な諸概念—労働、労働対象、労働手段、等々—によって固め直すという域にとどまっていた。残念ながらその作業は、『資本論』研究者やマルクス経済学サイドからすれば特に目新しいことのない諸概念の再確認作業にとどまっていたといわざるをえない。

そこで、改めてこの問題を考え直す必要があるが、そのためにはいささか迂遠のようではあるが、マルクス、エンゲルスにおける一周知といえは周知の一唯物史観の形成過程を再確認することから始めることとしよう。

## 第2項 唯物史観の形成過程

ヘーゲルは英・仏・米における近代社会の生成過程を前提としながら、客観精神論—法哲学—歴史哲学、家族—市民社会—国家論を構築した\*4。マルクスは、そのようなヘーゲルの法哲学への批判を通じて「市民社会の解剖学としての経済学」の批判的研究へと進んだ。そこでは、市民社会とりわけ「欲求の体系」が焦点とされた\*5。ヘーゲルのいう「欲求の体系」とは、欲求＝需要と労働＝供給との相互作用のシステムのことであり、ようするに市場経済のことである。ヘーゲルはこれを古典経済学によりながら略述しているといえる。

マルクスの『経済学批判序論』[1859年]における述懐によれば、ヘーゲル法哲学批判をつうじてここに照準を見定めたマルクスは、既成の経済学における既成の諸概念を批判的にとらえようとした。マルクスにおける経済学研究の試みは、まず『経済学・哲学手稿』[1844年]等の遺稿群として行われた。だが、そこではま

だ生産物、私有財産、階級を疎外された労働の所産とみななければならないといった程度の発想にとどまっていた。

もとより、「疎外された」労働ということには、すでにして「疎外」という自然からも共同体からも諸個体が分裂し原子化された特殊近代社会の関係性が含意されていた。それは疎外されざる類的本質としての人間一般の状態と疎外された近代社会とが対置される発想となっている。もちろん、それはあまりにも抽象的な概念的図式にすぎなかったがゆえに、『ドイツ・イデオロギー』[1845-46年]において概念の表現形式が—おそらくはエンゲルスの主導性のもとに—一定程度、濾過されることとなった\*6。

もっともエンゲルス自身は、晩年になって唯物史観、階級闘争史観の先駆者として、『フォイエルバッハ論』[1888年]（松村一人訳、岩波文庫、1960年、72頁）、その他においてギゾー、ティエリ、ミニエ、ティエールらの名を挙げている。かれらは、18世紀スコットランド啓蒙におけるファーガソン[1767年]『市民社会史論』に代表される文明開化＝市民化史観を19世紀フランスにおいて継承したものとして位置づけられるべきものであるが、とりわけギゾー[1828年]『ヨーロッパ文明史』がその代表的な著作である。

他方、マルクス自身も1852年の時点でティエリ、ギゾーやリカードらの名に言及しながら、「ほくよりずっと前に、ブルジョア歴史家たちはこの階級闘争の歴史的発展を叙述し、ブルジョア経済学者たちは階級の経済的分析をなしていた」（前掲、ヴァイデマイアー宛書簡）と明言しているが、実際、マルクスはギゾーの『ヨーロッパ文明史』を1843年から45年の間に読んだとされている（Guizot, [1828], *Historie de la Civilisation en Europe*. ギゾー『ヨーロッパ文明

史』安士正夫訳、みすず書房、1987年、訳者による「新版へのあとがき」322頁、参照）。周知のとおり、マルクスはギゾーの名を歴史家としてではなく政治家としてではあるが、『共産党宣言』と『経済学批判』の序論において繰り返し挙げている。そこにはマルクスが何らかの意味でギゾーを強く意識していたことが示唆されている。また、マルクスが『ヨーロッパ文明史』を読んだとされる時期は、使用概念や論理構成などから、より直接的な唯物史観の先駆者と目されるヴィルヘルム・シュルツ[1843年]『生産の運動』の刊行とほぼ同時期のことでもあった。

いずれにせよ、直接的にみてとれる事実経過としては『ドイツ・イデオロギー』においてエンゲルスの歴史過程論的な発想の刺激を受けることによって、マルクスは抽象的な類の本質の概念を自己批判し、それを歴史的な対自然的—対人間的な諸関係（分業、生産と交通）の始源的なあり方としてとらえ直すようになったことは間違いないところであろう。

それにより、それまでは没歴史的な概念にとどまっていた類的本質の概念は、「フォイエルバッハ・テーゼ」[1845年]において「社会的諸関係の総和」として、さらに抽象的にとらえ返されていたものの、『ドイツ・イデオロギー』において「歴史のかまど（汽缶室）としての市民社会」における「生産力と交通形態」としてより具体化されていったわけである\*7。

「[73頁] これまでの歴史のあらゆる段階に存在してきた生産諸力によって規定され、また逆にその生産諸力を規定する交通形態、それは市民社会である。この市民社会は、以上にのべてきたことからすでに明らかのように、単純家族と複合家族、いわゆる氏族制をその前提とも基礎ともしている。

……すでにここでわかることは、この市民社会があらゆる歴史の真のかまどであり舞台であるということである……。」(『ドイツ・イデオロギー』、引用頁数は花崎訳による。なお、廣松／小林訳では74頁。)

「[163頁] 市民社会という言葉は、所有諸関係がすでに古代的および中世的な共同体からぬけだしていた18世紀にあらわれた。市民社会としての市民社会は、ブルジョアジーとともに始めて発展する。しかしながら、生産と交通から直接に発展する社会組織は、いつの時代にも国家や他の観念論的上部構造の土台をなしており、ひきつづきおなじ名前によばれてきたのである。」(同前、引用頁数は花崎訳による。なお、廣松／小林訳では200-201頁。)

だが、マルクスは『ドイツ・イデオロギー』執筆過程においてエンゲルスからの刺激を受けたからといって、『経済学・哲学手稿』で掴み取った基本的な発想の枠組みを全面的に放棄したわけではなかった。エンゲルス主導による唯物史観的な思考回路を媒介としながらも、自己固有の思考経路においてマルクスは、『経済学・哲学手稿』における類の本質／疎外された近代社会という概念図式を、『経済学批判要綱』[1857-58年]においては、人格的依存関係／物象的依存関係という概念図式へと改鑄していくこととなったのである(Marx [1857-58]、邦訳頁数①97頁)。また、『経済学批判要綱』に含まれる『資本制生産に先行する諸形態』においては、人格的依存関係としての共同体の構造論的な歴史類型論として種族的、アジア的、ローマ的、ゲルマン的が措定されるようになった(同前、②117頁以下、参照)。

そこにおいてマルクスは、「社会的諸関係」の歴史汎通的な共通概念としてはゲマインヴェ

ーゼンという概念を、「社会的諸関係」の歴史的な諸形態としては物象的依存関係／人格的依存関係の二分分類、人格的依存関係としての共同体の諸形態としては種族的、アジア的、ローマ的、ゲルマン的な諸形態を、用いるようになっていったといえる\*8。

つまり、マルクスは、いわゆるエンゲルス主導の唯物史観の公式の形成過程と同時並行的に、

『経済学・哲学手稿』：{人間の類的本質／疎外された近代社会}

→「フォイエルバッハ・テーゼ」：{社会的諸関係の総和|市民社会／人類社会}

→『経済学批判要綱』：{ゲマインヴェーゼン|人格的依存関係(種族的・アジア的・ローマ的・ゲルマン的)／物象的依存関係}

という範疇形成を行っていったといえることができる。

こうして、一方で、エンゲルス主導で形成された唯物史観的な諸概念としては、対他的一対自然的な協働連関たる「歴史のかまどとしての市民社会」が「対自然的=生産力」と「対人間的=交通形態(～生産関係)」の二契機へと範疇化されていくとともに、他方では、マルクス独自の思考回路においては、人間の類の本質(その疎外態が市民社会)→社会的諸関係の総和→ゲマインヴェーゼンというように範疇化が展開された。したがって、この両系統の統合として、特殊歴史的形態としては「18世紀にあらわれた市民社会としての市民社会」でありながら、同時に歴史汎通的なゲマインヴェーゼン(「類的本質」・「社会的諸関係の総和」)の概念としては「歴史のかまどとしての市民社会」でもあるものが、生産力・生産関係(交通形態)としてとらえ返されたものとして、重層的、立体的に唯物史観の全体像をとらえ直す必要があるの

である。

この点に鑑みると、アルチュセール学派が  
 いうように、マルクス固有の思考回路が「認識  
 論的切断」によって廃棄されることによって  
 「市民社会」概念が廃棄され、エンゲルス主導  
 による唯物史観へと跳躍したというのは誤りと  
 いわざるをえないのである。

### 第3項 『経済学批判序論』の述懐とその宇野 弘蔵による読解

ところが、マルクスは、以上に概観したよう  
 な唯物史観および経済学批判の形成に至る試行  
 錯誤の過程について、『経済学批判序論』（1859  
 年）においては、次のように極めて圧縮された  
 かたちでしか述懐していない。そのため、じつ  
 に多くのミッシング・リンクが生じてしまった  
 わけである。『経済学批判序論』において、マ  
 ルクスは次のようにいっている。

「[8頁] 私を悩ました疑問の解決のため  
 に企てた最初の仕事は、ヘーゲルの法哲学  
 の批判的検討であって、その仕事の序説は、  
 一八四四年にパリで発行された『独仏年  
 誌』に掲載された。私の研究の到達した結  
 果は次のことだった。すなわち、法的諸関  
 係ならびに国家諸形態は、それ自体からも、  
 またいわゆる人間精神の一般的発展からも  
 理解されるものではなく、むしろ物質的  
 な諸生活関係に根ざしているのであって、  
 これらの諸生活関係の総体をヘーゲルは、  
 一八世紀のイギリス人およびフランス人の  
 先例にならって、『市民社会』という名の  
 もとに総括しているのであるが、しかしこ  
 の市民社会の解剖学は経済学のうちに求め  
 らなければならない、ということであっ  
 た。」

「[8頁] パリで始めた経済学の研究を私

はブリュッセルでつづけた。ギゾー氏の追  
 放命令の結果、同地へ私は移ったのであっ  
 た。私にとって明らかとなった、そしてひ  
 とたび自分のものになってからは私の研究  
 の導きの糸として役だった一般的結論は、  
 簡単にいえば次のように定式化することが  
 できる。(以下、有名な唯物史観の公式の  
 説明が続けられる。)(『経済学批判序論』、  
 引用は杉本俊朗訳による。)

つまり、初期マルクスはヘーゲル法哲学の批  
 判をつうじて、1844年の『独仏年誌』に掲載  
 された「ヘーゲル法哲学批判序説」と「ユダヤ  
 人問題に寄せて」によって、「物質的な諸生活  
 関係の総体」すなわち「市民社会」の解剖学は  
 経済学に求められなければならないという研究  
 結果に到達した後、パリ、ブリュッセルで続け  
 られた経済学の研究によって、「私にとって明  
 らかとなった、そしてひとたび自分のものにな  
 ってからは私の研究の導きの糸として役だった  
 一般的結論」が、いわゆる唯物史観の公式とし  
 て定式化されたというのである。

ところで、宇野弘蔵は、この『経済学批判序  
 論』を詳細に読み解きながら、次のように述べて  
 いることに注目すべきである。

「[99頁] マルクスが『経済学批判』の序  
 文に述べている、いわゆる唯物史観の公式  
 は、単に経済学の対象をなす商品経済の社  
 会に限られるものではなく、人間の歴史に  
 関する研究の一般的結論として展開されて  
 おり、マルクス自身もそれが彼の経済学研  
 究にとって『導きの糸』として役立ったも  
 のとしている。もちろん彼がかかる結論を  
 うるにいたったのは、むしろ経済学的研究  
 に入る前からの歴史・哲学・法律学等の研  
 究によるものといつてよいのであろうが、

しかしそれにしてもこの結論が、経済学の研究とともにその対象をなす商品経済と極めて密接な関連をもっていることは、彼のこの結論に対する叙述においても明らかである。……『法的諸関係および国家諸形態は、それ自身で理解されるものでもなければ、またいわゆる人間精神の一般的発展から理解されるものでもなく、むしろ物質的生活諸関係、その諸関係の総体をヘーゲルは一八世紀のイギリス人やフランス人の先例にならって『ブルジョア社会』という名のもとに総括しているが、そういう諸関係にねざしているということ、しかもブルジョア社会の解剖は、これを経済学にもとめなければならない、ということであつた。』(原著注 『経済学批判』邦訳岩波文庫版12-3頁) 明らかに『ブルジョア社会』を解剖する経済学の内に、あらゆる社会に通ずる歴史的規定を求めようというのである。その点が、公式にいう『現実の土台』としての『生産諸関係の総体』の形成する『社会の経済的機構』に対応して、『そのうえに、法律的、政治的上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識形態』があるという規定となつてあらわれている。前にも述べたように、経済学は商品経済を、特に資本家的商品経済として体系的に解明せんとするものであるが、それは資本主義に先だつ諸社会と共通の地盤を有しているのであつて、その特殊規定は、ただ単にその特殊規定につきるわけではない。いいかえればその特殊規定の内にも、他の諸社会に共通するものを包摂しているのである。経済学の唯物史観に対する関係も、この点にかかっているのである。(宇野弘蔵 [1962年] 『経済学方法論』「Ⅲ-1 経済学の唯物論」。引用頁数は著作集第9巻

による。)

宇野はここにおいて確かに、「現実の土台」としての「生産諸関係の総体」が形成する「社会の経済的機構」、それに対応する「法律的、政治的上部構造」、「一定の社会的意識形態」といった唯物史観の諸範疇と、それにもとづく唯物史観の公式とは、「ブルジョア社会の解剖学」としての経済学のうちに、あらゆる社会に通ずる歴史的規定を人間の歴史に関する研究の一般的結論として展開しているものである、ということを描いていたわけである。

それは、唯物論、唯物史観が経済学に先行するのではなく、経済学をつうじて唯物論、唯物史観が論証されるという主張であるが、このように経済学をつうじて唯物史観の分析範疇も論証されるべきものとする発想は、じつはマルクス自身の思考回路の重要な核心を把握したものと見える。

#### 第4項 『経済学批判序説』における断片的言及

他方、『経済学批判序論』においては、みずからのライフ・ヒストリーに即してきわめて不十分に回顧されてきたにすぎなかったマルクスの思考過程は、『経済学批判序説』のほうではきわめて断片的ながら、論理的な展開過程として再構成されようとしていた。

周知のように、マルクスは『経済学批判序説』の「三 経済学の方法」において、経済学における諸範疇はあくまでも歴史の最終地点である当面する社会の分析から得られるものであると同時に、歴史的な諸社会形態を把握するための範疇ともなるものであるとし、「人間の解剖が猿の解剖の鍵である」としている。また、それらの諸範疇は、近代社会の向下的分析の帰結として得られた最も単純で抽象的な概念<sup>\*9</sup>を出発点として、上向的総合によってより複雑で

具体的な概念へと再構成—再配列されなくてはならないとしている\*10。

このように、『序説』においては、マルクスが『序論』できわめて不十分な形で開示した唯物史観の形成に至る試行錯誤的な思考過程のライフ・ストーリーに即した回顧ではなく、諸範疇の導出過程の論理的手続きを提示しようとしていたことが見て取れるのである。

それを端的に示しているのが次の箇所である。

「一定の労働にたいする無関心は、諸個人が一つの労働から他の労働に移っていくことが容易であり、労働の一定種類は彼らにとって偶然的であり、それゆえ無関心的なものであるような社会形態に照応している。……このような状態は、ブルジョア社会の最も近代的な定在形態—アメリカ合衆国—で最も発展している。したがって、「労働」、「労働一般」、たんなる労働 [Arbeit sans phrase] といった範疇の抽象、近代経済学の出発点は、ここにおいてはじめて実際上真実となる。」(『経済学批判序説』、「三 経済学の方法」56-57頁、S.39-40)

つまり、マルクスによると、当時、アメリカ合衆国で最も発展していたようなブルジョア社会の近代的な定在形態においては、諸個人が一つの労働から他の労働に移っていくことが容易となっており、そのような社会状態を基盤として「労働」、「労働一般」といった範疇の抽象が可能となったというのである。

ただし、この引用箇所は、アダム・スミスが生産的労働を農業労働などのような特定の労働から切り離して抽出したという文脈の中で断片的に述べられているものであり、唯物史観の範疇の形成という文脈で語られているものではなかった。

実際のところ、『経済学批判序説』においては、第一節「生産」、第二節「分配、交換、消費にたいする生産の一般的関係」において生産・分配・交換・消費あるいは労働といった諸範疇が取り上げられているものの、それらはいくまでも経済学の範疇として取り上げられているにとどまる。また、そのようなものとして過去の社会諸形態に対して「人間の解剖は猿の解剖の鍵である」という関係をもつことが指摘されるにとどまっている。

それに対して、第四節は「生産、生産手段と生産諸関係。生産諸関係と交易諸関係。生産諸関係と交易諸関係とにたいする国家および意識の諸形態の関係。法律諸関係。家族関係」という長い標題が付けられているが、内容的にはただ、「ここで述べなくてはならない、またわすれてはならない点についての注意 Noteabene」についての8項目からなる箇条書きが並べられているにすぎない。しかも、これらの箇条書きは、「生産諸関係と交易諸関係とにたいする国家および意識の諸形態の関係。法律諸関係。家族関係」といった第四節標題の後半部分にだけ関わっており—とりわけ芸術論へのそれ自体は興味深い内容をもった言及へと文章が流れていってしまっている—、肝腎の「生産、生産手段と生産諸関係。生産諸関係と交易諸関係。」の部分に関する言及は一切なされていないのである。

つまり、『経済学批判序論』のほうでいさか唐突に託宣されることとなった生産力・生産関係、社会構成、等々の唯物史観的な諸範疇の導出や根拠付けについての論理的な説明がなされるべきであった第四節が、肝腎の内容を欠いたまま放置された状態となっていたわけである。

しかし、実際に第四節において、生産力・生産関係、社会構成、等々の唯物史観的な諸範疇

の説明が展開されたとするならば、それは、おのずから「三 経済学の方法」で省察された生産・分配・交換・消費あるいは労働といった経済学の諸範疇の抽象についてと同様に、生産力・生産関係、社会構成、等々の唯物史観的な諸範疇の抽象の手続きが論理化されることとなったはずなのである。

すなわち、後者もまた、近代の経済学が掲げている近代的な社会形態の範疇であるとしてこそ、「すべての社会諸形態に妥当する太古からの関連を表現する最も単純な抽象」となりうる事が明確に位置づけられたであろうと考えられるのである。

このようにして、これらの諸範疇の配備＝「人間の解剖」は、「猿の解剖の鍵」＝「先行する諸形態」の分析の概念装置、分析枠組、解説格子となるのである。

事実、マルクスは、『序説』を含む『経済学批判要綱』においては、「貨幣に関する章」、「資本に関する章」においていわば「人間の解剖」についての叙述を上向的に展開しながら、それを踏まえて「猿の解剖の鍵」として『資本制生産に先行する諸形態』を展開したのであった。

つまり、マルクスにおいては、『ドイツ・イデオロギー』から『序論』に至る唯物史観の公式は、いまだ直観的に掴み取られた「導きの糸」なのであったが、それは、『経済学批判要綱』の論理展開をつうじて、改めて論理的に位置づけなおされるべきものとしてあったということができるのである。

こうして今や、『序論』におけるライフ・ヒストリー的な回顧、『序説』における範疇抽出手続きの論理化が、それぞれきわめて不十分であったために顕在的に読み取りにくくなっていたミッシング・リンクがあきらかとなる。

『ドイツ・イデオロギー』や『序論』で唐突

に、「死んだ事実の山」の分析に終始する経験論的な帰納法によって導かれた諸範疇とは一線を画するものとして、まるで託宣のように一パリバルの言によれば「ドグマティックな簡潔さ」をもって一下された唯物史観の諸範疇は、たんにマルクス、エンゲルスの天才的直観によって無媒介に導き出されたというだけのものではなかった。それは次にみるように純粋化傾向にもとづく方法模写説という論理的な導出手続きの裏付けを背後にもつものだったのである。

### 第5項 方法模写説と市民社会－国家論及び唯物史観の連関

宇野弘蔵による、純粋化傾向<sup>\*11</sup>によって歴史的過程それ自身が経済学、唯物史観の諸範疇を形成してきたものであるとするとらえ方は、方法模写説と呼ばれる独自の的方法論として定式化された。

「[160頁] たとい一時的にしる、また特殊の事情をもってにしるとにかくその商品経済の原理をもって、国内的には勿論のこと、対外的にもますます有力に支配し、自らの力でその体制を完成する方向に進みつつあったということは、資本主義社会に関してその原理を経済学的に確立することを可能ならしめるものに外ならない。われわれはここではなんらかの主観的立場による指導概念によって対象を処理するというのでなく、資本主義社会自身が形成しつつある純粋の諸関係を理論的に構成すればよいことになる。この点はまさに歴史の基礎科学としての経済学に特有なものではあるまいか—と考えるわけです。」

「[161頁] 経済学は、その原理論で単に対象の模写というのでなく、方法自身の模写をも示している—と僕は思うのですが、

どうでしょう。そしてそれこそ唯物論を客観的に基礎づけるものと考えなのです。」(宇野弘蔵 [1955年]「帝国主義論の方法について」。引用頁数は著作集第10巻による。)

「[154頁] 私は、かつて経済学の諸原理は、単に対象を模写するのではなく、方法自身をも模写するものであるといったことがあるが(原著注：拙著『資本論』と社会主義』226頁参照)、それは対象の模写が同時に方法の模写でもあることを意味するものにほかならない。それは、すでに繰り返して述べてきたように、原理論の対象をなす純粹の資本主義社会なるものが、単に現実の資本主義社会から主観的に抽象して想定されるのではなく、資本主義の発展そのものが、客観的に純化作用を有しているものとして想定されるものであるからである。方法自身が客観的に対象とともにあたえられるのであって、対象に対してなんらかの主観的な立場によって立向かうわけではない。」(宇野弘蔵 [1962年]『経済学方法論』「Ⅲ-4 経済学と弁証法」。引用頁数は著作集第9巻による。)

ここで宇野が言っていることは、歴史的過程そのものが、商品・貨幣、資本といった諸範疇、諸概念を形成してきたのであって、それらは研究者が何らかの主観的関心による解釈格子を現実にあてはめて分節化することによって得られるような恣意的な諸範疇、諸概念とは異なるということである。宇野によれば、そのような解釈格子としての方法そのものが、現実の歴史的過程そのものによって形成されるのであり、研究者はそのような解釈格子としての方法そのものをただ模写すればよいのである<sup>\*12</sup>。

しかしながら、このように宇野自身が純粹化

傾向にもとづく方法模写説と唯物史観の密接な関連について指摘している箇所があるにもかかわらず、従来、マルクス本来の市民社会—国家論、唯物史観(およびヘーゲルの法哲学、歴史哲学)と、宇野の純粹化傾向にもとづく方法模写説、それを基礎とする経済学原理論とが、有機的に結び付けられる道筋は断たれてきたといわざるをえない。

そもそも純粹化傾向とは純粹資本主義社会へと近似していく歴史的傾向のことであるが、それについてはマルクス自身、たとえば『資本論』第3巻において次のように述べていた。

「[S.184] 理論においては資本家の生産様式の諸法則は純粹に展開されるということが前提される。現実においては常にただ近似のみが存在する。しかしこの近似は、資本家の生産様式が発展すればするほど、そして従来の経済的残滓による資本家の生産様式の不純化と混合とが除去されればされるほど、ますます大きくなる。」(『資本論』第3巻第10章)

だが、このような純粹な資本家的生産様式への歴史的傾向というものは、同時に、純粹市民社会へと近似していく傾向でもあろう。したがってそれは、いいかえると「資本の文明化(=市民化) civilisierend作用」の傾向でもあることになる。

「[S.440] 資本の生産条件をもつのは、つまりそれらを充足し、また実現しようと努めるのは、ただ資本だけであるから、流通の前提、流通の生産的起点となるすべての地点で、これらの地点を自己に同化させようとするのは、すなわちこれらの点を、資本化する生産あるいは資本による生産に転

化しようとするのは、資本の一般的な傾向である。このような布教的 [propagandistisch] (文明化的 [civilisierend]) 傾向は、ただ資本だけに —それ以前の生産諸条件とは区別して— 固有のものである。」(『経済学批判要綱』、「Ⅲ 資本にかんする章」。邦訳頁数、220-221 頁。)

このように、マルクスは、流通の生産的起点となるすべての地点で、これらの地点を自己に同化させようとする資本の一般的な傾向のことを、「文明化傾向」(=市民化傾向)と呼んでいる。これはまさに19世紀末から20世紀前半に至る帝国主義から全体主義、超国家主義の時代に「逆転」を余儀なくされてしまった歴史的傾向そのもののことであろう。

したがって、宇野のいう純粋化傾向とは、「文明化傾向」(=市民化傾向)と同じ事態を指したものであり、それは全世界が純粋市民社会へと近似していく傾向とも密接に結びついた概念なのである。

実際、18世紀以来、西欧人に抱かれるようになった純粋市民社会の表象によってはじめて、社会構成の諸契機は渾然一体となった漠然とした表象から、欲求の体系としての自立的経済過程と、悟性国家、理性国家、絶対精神(芸術、宗教、学問)等の観念的上部構造との分節化が可能となったといえるわけである。さらに、それをもとに自立的経済過程の諸契機たる生産力・生産関係等の分節化も可能となったのである。

このように、『序論』で不十分にしか開示されていなかったマルクス自身のライフ・ヒストリー的な試行錯誤の過程も、『序説』で不十分にしか展開されていなかった唯物史観の諸範疇の論理的な導出過程も、その論理的な道筋をつぶさに追跡すれば、まさに宇野の考えていたよ

うな方法論に辿り着かざるを得ないことになるのである。

こうして、従来、ヘーゲル-マルクス体系と、カント的な悟性的性格のつよい宇野三段階論体系との接合方法は容易には見出し難かったものなのであるが、じつは宇野自身において、純粋化傾向による方法模写説は唯物史観の諸範疇をも客観的なものとして導出する方法論として提起されていたのである。

とはいえ、宇野自身が純粋化傾向と唯物史観の諸範疇の方法模写について言及しているのは、この箇所のほかにはあまりみられないだけでなく、当該論文の全体の趣旨自体もこの論理をみえにくくしていたといえよう。

そもそも、宇野の史的唯物論のとらえ方はきわめてオーソドックスなものであり、それゆえ、たんなるイデオロギーにとどまるものと位置づけられていた。そこには、唯物史観が歴史科学を志向する作業仮説であるというような発想すらまったくなかった。また、宇野の唯物論のとらえ方は、レーニンの模写説、反映論そのままであった。

したがって、折角、宇野自身が純粋化傾向にもとづく方法模写説と唯物史観の論理的連関について指摘している箇所がわずかながらも存在したにもかかわらず、それが唯物史観の形成史研究の諸成果や市民社会-国家論、自己疎外論、物象化論、等々の研究成果と結び付けられる理路が見出されないままとなってきたのであった。公式化された「弁証法的唯物論と史的唯物論」とは区別された、マルクス本来の唯物史観、弁証法、自己疎外論、物象化論などの哲学的論理と、宇野の高度な完成度を誇る経済学原理論とが、有機的に結び付けられる道筋が不可視のものとなり、宇野の研究成果が20世紀後半におけるマルクス文献学の諸研究成果や、創造的な新マルクス学派の諸研究成果と分断されたまま

になっていたのであった。

しかし、いまや以上のような関連があきらかとなったことによって、

- 一、抽象的な哲学としての自己疎外論・物象化論・主体的実践的活動論から、弁証法的論理学・自然哲学・精神哲学までのエンチクロペディー的体系性
- 二、歴史哲学を科学化するための作業仮説としての唯物史観の諸範疇
- 三、近代社会の理念的構造論としての家族—市民社会—国家論
- 四、宇野純粋化傾向論＝方法模写説と経済学三段階論（原理論—段階論—現状分析）

という各領域は、とりわけ第四の領域が外在的な関連にとどまっていたものが、緊密な内在的論理によって貫徹されることが可能となったのである。

## 第2節 方法模写説から範疇模写説へ

### 第1項 「範疇の構成方法」の模写

ところで、方法ないし方法論というとき、様々な場面に応じてさまざまなものがある。宇野が「方法模写説」というときの「方法」という用語は、何を意味していたのであろうか\*<sup>13</sup>。宇野が念頭に置いていたのは、マックス・ヴェーバーが主張したような主観的問題関心による理念型の構成方法に対置されるべき方法ないし方法論であった。

「[154頁] いうまでもないことであるが、純粋の資本主義社会が、われわれのなんらかの主観的立場によって抽象され、想定されたものではなく、客観的に資本主義の発展の内に認められる傾向として想定されるものであるということは、[155頁] 同時

にまた実験室的対象のように単なる部分的な、全体の過程から切断されて採り上げられたものではないことを示すのである。」（宇野弘蔵 [1962年] 『経済学方法論』「Ⅲ-4 経済学と弁証法」。引用頁数は著作集第9巻による。）

それは、歴史過程それ自身によって客観的な範疇構造が構成されたものが純粋資本主義社会とその原理論であるという意味で、ヴェーバーが主張した主観的問題関心による理念型の構成方法とは異なり、客観的かつ「唯物論」的であり、なおかつ、部分的ではなく全体的な認識だというのが宇野の主張であった。

ここで宇野が問題としているのは、純粋化傾向が与えてくれる範疇の純粋化を、そのまま模写すれば範疇を純粋化する「方法」をも模写したことになるということである。

このように、宇野のいっている「方法」とは、内容的にみると、範疇を構成する「指導概念」が主観的恣意によるか、それとも主観的恣意によらないかという「範疇の構成方法」のことにほかならなかった。「方法」、「方法論」という概念は含意が多義的であるので、むしろ「範疇」の模写といたほうが適切ではなかったかと考えられる。

すなわち、本稿において「方法模写説」というよりも、むしろ「範疇模写説」というほうが適切であると考えられる所以である。

### 第2項 黒田寛一『宇野経済学方法論批判』について

ここで、若き日に哲学徒として宇野と交流のあった黒田寛一の『宇野経済学方法論批判』[1962年／1992年]による、哲学的な角度からする宇野方法論への批判について検討してみよう。黒田はそこで、宇野経済学方法論には認識

論が欠如していると批判している。

「[60頁] このような認識方法論ぬきの方法論（つまり存在論的方法＝論証一辺倒主義）という点にこそ、宇野経済学方法論の独自性があるのである。」（黒田寛一 [1962年／1992年]）

ここでは一見、黒田寛一は哲学徒としてなら誰もが考えそうな認識論的な方法の問題を宇野に投げかけているだけのようにも見える。たしかに、経済学が純粋化傾向という対象だけではなく対象を概念化する方法それ自体を模写するという言い方は誤解を招きやすい。哲学において模写とは、物質の意識への反映という意味で使われてきからである。その場合、模写、反映するのは経済学そのものではなく経済学研究者の意識でなければならない。宇野においては、方法を模写する意識の問題が抜け落ちている。前節において「範疇模写説」のほうが妥当とした所以である。

その限りにおいては確かに、そもそも宇野には経済学の下向的分析における諸範疇の生成過程それ自体の認識論的・科学論的な方法論は、まったく問題関心の外にあったというほかはない。

「[416頁] ……経済学の理論が前に申したような客観的事実の反映である点、しかも方法自身でもそうであるということが大切なのです。それを認識するために主体の主観がなければならぬことは言うまでもないですが方法自身も反映ということになれば問題はそれ以上にはないと思っています。」（黒田が宇野に出した質問に対する返信ハガキ [1956年6月18日付け] の起こし。黒田 [1962年／1992年]、所載。）

つまり、宇野にしてみれば、経済学的な諸範疇が形成されてきた過程は主体の主観による恣意的なものではないということが問題のすべてなのであって、哲学的・認識論的な方法論議の問題ではないということであった。

しかしながら、黒田にとっての認識方法論とは、実際のところは次のようなものであったので、次第に宇野との問題関心は幾重にもずれていることがあきらかとなる。

「[61頁] 古典派経済学をマルクスが批判的に継承したのは、まさしくプロレタリアの『否定的立場』が前提になっていたからであり、そ [62頁] してこの前提が経済学研究を媒介にして結果に止揚されるところに、『資本論』が措定されうる……。」（同前）

「[63頁] このような、客体的限定を基礎とした認識主体の対象変革的な実践の立場（プロレタリアの立場）においてはじめて、認識対象の法則性の概念的把握が可能になるということは、一般的には人間認識が客観性と主観 [64頁] 性との、あるいは対象認識と価値意識または価値判断との統一として成立するというにほかならない。」（同前）

すなわち、黒田においては、認識方法論の問題は、純然たる哲学的認識論の問題ではなく、プロレタリアの「場所的立場」からする実践的な価値判断（つまりは“革命的共産主義”イデオロギー）と不可分のものとされていたのである（そのようなとらえ方が、黒田にとっては純然たる哲学的認識論の帰結のつもりだったのであろうが）。もっとも黒田は、周到にも次のように付け加えることも怠ってはいなかった。

「[64頁] しかし、このことは、もちろん『なんらかの主観的立場による指導概念によって対象を処理する』ことではない。資本制経済そのものが必然的にうみだした否定的実存（物化された人間）であり、またまさにこのゆえに同時にそれを否定し止揚せざるをえない、歴史の主体としてのプロレタリアートのこの立場を認識者自身の主体的根拠となすことによってこそ、資本制社会の経済構造の本質的な認識把握が可能となるのであり、その意味でプロレタリアの立場が学問的認識において即自的に前提されざるをえない、ということにすぎない。」(同前)

つまり、プロレタリアの「場所的立場」なるものは、宇野のいう純粋化傾向による客観的な所産でもあるということであろう。

だが、このような論法は、認識者自身の主体的根拠を資本制経済が必然的にうみだし・かつ・それを否定し止揚せざるをえないプロレタリアの立場とせよ、さすれば「なんらかの主観的立場」と異なる本質的な認識把握は資本制経済が否定し止揚されざるをえないものとなる、あるいは、プロレタリアは資本制経済を否定し止揚せざるをえない、ゆえに認識者はプロレタリアによって否定し止揚されるものとして資本制社会の本質的な認識把握が可能となるであろう、というようなものである。

したがって、それは以下の文章の「ルカーチ」とあるところを、そのまま「黒田寛一」に置き換えても妥当するようなものでしかなかったのである。

「[250頁] ルカーチのいっていることをやさしく諷刺すれば、階級意識に目覚めよ、

するとこの社会は階級的に視えてくるだろう、あるいは、階級社会は存在する、ゆえに人間は階級意識に目覚めるであろう、という観念の循環論であることがわかる。」(吉本隆明 [1965年]「自立の思想的拠点」。引用頁数は『吉本隆明全著作集13』、勁草書房、1969年、所収による。)

こうしてみると、宇野が次第にいささかうんざりしたように、木で鼻を括ったような返事しか出さなくなってしまったのも、やむをえざる所であったといえよう。

「[417頁] 過日はお手紙いただき乍ら御返事延引していました もっとも十分にお答えできませんが科学的論証ということをよく考えていただきたいと思うのです 私自身もそれが完全にできているとは思わないのですが論証の中に認識主体の関係などをもちこんでいては論証にはならないと考えるだけです」(黒田が宇野に出した質問に対する返信ハガキ [1959年6月28日付け]の起こし。黒田 [1962年／1992年]、所載。)

しかしながら、ここで宇野は「認識主体の関係」のなかに認識論の問題と価値判断論（というよりは黒田特有の”革命的共産主義”イデオロギー）の問題を一緒にくたにして突き放しているにすぎない。だが、それでは認識方法論そのものの問題はなんら解決されないままである。黒田による宇野経済学方法論批判において意味があるといえるのは、まさしくただ、宇野方法論は「認識方法論ぬきの方法論」であるという言葉の部分だけであるといつてよい（この点は、注13における廣松渉の指摘にも関わっている）。そこで、方法模写説ないし範疇模写説の認識

方法論的な問題については、第三節として節を改めた上で、現象学的な認識論哲学による根拠づけを考察していくこととする次第である。

### 第 3 節 範疇模写説の現象学的再措定

#### 第 1 項 現象学的に再構成された論理的連関

何ものをも前提としないで思考しようとするとき、絶対に確実なのは「いま－ここに－ある」という意識への現象の現れに関する感覚的確信だけである。それは、デカルトの言ったような「いま－ここに－ある」ということすらも疑っているという反省作用に先立つ感覚的確信であるが、疑っている「我思う、故に、我在り」ということへの感覚的確信もそこに由来するものである。

フッサールは、不確実なものを捨象し括弧に入れ、意識の志向対象としての事象そのものへ還元することを「現象学的還元」または「判断中止」と呼んだ。とくに晩年のフッサールは、現象学的還元はまずもって、科学の説く「即自的で真なる世界」から「生活世界」への還元でなければならないとするようになった。「生活世界」とは、いっさいの学に先立ち、つねにすでに、われわれの直接の経験に与えられている世界であり、学そのものもこの「生活世界」から出発してはじめて、その真の意味を明らかにされうるものだとされる<sup>\*14</sup>。

〔268頁〕すなわち、あらゆる構成の、結局はただ一つの機能中枢としての絶対的自我〔エゴ〕への還元によって、判断中止を意識的に改造する必要があるのである。このことが今後は、超越論的現象学の方法全体を規定することになる。まず前もってあるのは、世界である。すなわち、たえず存在確信と自己確認の中であらかじめ与え

られている、疑いを容れない世界が、先行している。もしわたしがこの世界を基礎として『前提』していないとしても、この世界は意識作用のうちにある自我としてのわたしにとって、たえざる自己確信によって妥当している。しかもそれは、わたしにとってあるがままに、つまり、個々の点では、ときには客観的に妥当であり、ときにはそうでないこともあるが、それらのすべてを含んで妥当しているのである。それはさらに、わたしにとって現実的であるような世界たる以上、すべての学問や技術を含み、すべての社会的、個人的諸形態や諸制度を伴ったものとして、妥当しているわけである。〕(Husserl, E. [1935/1936], *Die Krisis der europäischen Wissenschaftlichen und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*. フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳、中央公論社、1974年。引用頁数は邦訳による。)

また、ハイデッガー [1927年]『存在と時間』(Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 1927. 引用は細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、1994年、上、により引用頁数は原著頁数による)は、フッサールが「生活世界」の概念を提起するのに先立って「世界＝内＝存在」の構造分析を行っていた。

『存在と時間』は、第一編の「現存在の予備的基礎分析」では、現存在を《世界＝内＝存在》として規定し(第二章)、まず《世界の世界性》として《道具連関》-《ツーハンデンハイト》(第三章)、次に《共同存在＝自己存在としての世界＝内＝存在》を《ダス・マン》として(第四章)、さらに《内＝存在そのもの》を、《情態性》《了解作用》《語り》《頹落－おしゃべり・

好奇心・あいまい》からさらに根源的全体性としての《不安という根本情態性→Sorgeとしての現存在としての存在》、つまり、《内=存在そのもの》として《Sorge》を画定する（第五章）\*15。

ここでハイデッガーのいう「世界」とは、科学者の眼に映ずるような物存在 *Vorhandensein* ではなく、世界=内=存在が配慮において出会う存在 *Zuhandensein*、つまり「……のための或るもの *etwas, um zu...*」として有意義性をもった道具的な存在者が、ある道具は別の何かのため、というように次々と連鎖する「……のため」という指示的連関をもった構造的全体とされる (*ibid.*, S.69f.)。

「もっとも身近に出会う存在者の存在を現象学的に挙示するにあたって、われわれは日常的な世界=内=存在を手引きとする。このような世界=内=存在は、また、世界の内、かつ内世界的存在者にたずさわる交渉 (*Umgang*) とも呼ばれる。交渉は、いつもすでにさまざまな配慮の様式へ分散している。しかし、すでに示したように、もっとも身近な交渉の様式は、ただ覚知するだけの認識というようなものではなく、ものを操作し使用する配慮であって、これにはそれなりの『認識』がそなわっている。現象学的な問いは、まず、かような配慮において出会う存在者の存在へ向けられるのである。」(S.67)

「われわれは、配慮において出会う存在者を、道具 (*das Zeug*) となづける。交渉の中で見あたるものは、書く道具、縫う道具、工作する道具、乗っていく道具、測定する道具などである。」(S.68-69)

「道具というものは、本質上、《……するためにあるもの》(*etwas, um zu...*)」であ

る。この《……するためにある》ということには、有用性、有効性、使用可能性、便利性等というようなさまざまな様態があるが、これらがひとまとまりの道具立て全体の全体性を構成している。」(S.68-69)

「現存在は、有意義性に親しんでいるそのありさまにおいて、存在者が発見されうることの存在的な可能条件であり、その存在者は趣向性という存在様相 (用具性) において世界の内部で出会い、このようなありさまでその自体相を打ち明けることができるのである。」(S.87)

また、「現存在の世界は共同世界 (*die Mitwelt*) である。内=存在は、ほかの人びとの共同存在 (*das Mitsein*) である。ほかの人びとの内世界的な自体存在は、共同現存在 (*das Mitdasein*) である」(*ibid.*, S.118) とされ、さらに、現存在=人間は、その都度それぞれ私であるにしても、日常的平均的には自分とも他人ともいいがたい《ダス・マン *Das Mann*》という在り方をしているとされる (*ibid.*, S.129)。

したがって、「世界=内=存在」の現れの世界平においてまずもって現れてくる「世界」とは、共同存在としてある有意味的な道具連関である。

ところで、それは、次のようなかたちで語彙的な体系を変換することが可能であろう。すなわち、「世界=内=存在」の世界=内における配慮としての主体的実践活動は、「世界=内=存在」の「いま-ここに-ある」という感覚的確信、感覚的確信として生起する飢え、渇きなどの根源的な受苦性、それによってもたらされる (現れとしての) 自然と身体と意識の分裂、自由な意識の不断の自己否定運動、意識による身体を媒介とした自然への働きかけとしての労働・生産過程、それによる道具の生産・再生産として範疇的に分節化される。

だが、フッサー、ハイデッガーによる「生活世界」、「世界=内=存在」の考察は、このようなどころまでとどまっていた。ここでは、「世界」はいまだ没歴史的、没概念的な混沌とした表象のままである。

だが、「生活世界」、「世界=内=存在」の現れにおいて、それは以下にみるように、特定の範疇的な分節化構造をもったものとして現れるものなのである。

すなわち、共同存在としてある有意味的な道具連関としてある「世界」は、対自然的-対他的な協働連関として夫婦、親子、兄弟姉妹からなる家族関係だけではなく、市民個人からなる市民社会、商品所有者、貨幣所有者からなる市場、等々としても、つねにすでに、分節化されてくるものなのである。

この「世界」の基礎的な範疇構造においては、次の事柄が成り立っている。

夫婦、親子、兄弟姉妹、市民、公民、商品所有者、貨幣所有者、等々の様々な場面に応じた役割としての「人格」を使い分けるが、それらの「人格」を通して、それぞれの個人は自己同一性をもつ。個々の具体的な人間は、このような諸「人格」間の自己同一性を担う存在として、抽象的人間に還元される。

抽象的人間は、対自然的-対他的な労働によって労働生産物を産出し、それを獲得して生存を維持する。それは、抽象的な形式としては抽象的人間の自己意識にもとづく身体的労働の作用を自然的世界に対象化したものを獲得するのであり、「自己労働の自己所有」-経済学批判を媒介とした学知的立場からはあくまでも仮象にとどまるものであるが、さしあたりの現れのままとしては一として現れる。

このような労働する身体は、同時に、消費して生存する身体でもある。だが、労働し消費することによって生存する身体は、意志や意識・

観念の働きのなしには労働、消費という行為を営むことはできないことも自明の事柄として現れる。

つまり、人間的な現存在にとっての労働・消費する身体とは、本能に基づいて自動的に運動する機械のような存在なのではなく、意志や意識・観念を主観的な基点 (subject) として動かされ、動く存在である。意志や意識・観念は身体と不可分のものとしてあるので、主観としての意志や意識・観念は身体と不可分の主体として「世界=内」に存在し、「世界」に対して働きかける。

このようにして、「世界=内=存在」という感覚的確信の内部において、つねにすでに、「世界」は意識作用、労働作用をなす主観的=主体的な身体と、意識作用、労働作用の客観的=客体的な対象 (意識対象、労働対象) とに分節化されている。

主観的=主体的な身体は、飢えや渴きにたえず苛まされる受苦的なものとしてある。そのため、「世界=内」における用在としての客観的=客体的な対象に働きかけ、そこからの獲得物を消費することによってしか、この受苦を解消しえないことを痛感=感覚的確信している。

だが、受苦を痛感=感覚的確信する「世界=内=存在」は、受苦を媒介として認識し労働する者 (「内=存在」) と、認識され労働される物 (「世界」) とに分裂する。これは、根源的な自己分裂であり、根源的な自己疎外である。

主観的=主体的な意志や意識・観念、身体の働きかけとは独立に存在するように現れるようになった「世界」は、「物質的自然」および「他者からなる世間」からなる。

しかし、主観的な意志や意識・観念が定位するところの身体なるものは、それ自身が「世界」の「物質的自然」に属しているものとして現れる。このような、「物質的自然」であって

同時に「物質的自然」ではない身体という存在の「世界」からの分裂が、「原生的疎外」である。

これに対して、身体を「物質的自然」に対して働きかけさせる主観的＝主体的な意志や意識・観念が、身体からも「物質的自然」からも分裂することを「純粹疎外」と呼ぶ。純粹疎外された主観＝主体は、対象を分類したり普遍化したりする意識・観念の働き＝類化能力をもつ存在という意味で「類的本質」とも呼ばれる。

原生的疎外は純粹疎外を含む。原生的疎外から純粹疎外を差し引いたものは、身体の主観的＝主体的な意志や意識・観念の意のままにならない部分であり、意識されない領域（＝無意識）の領域である。このような無意識の領域と、純粹疎外による主観的＝主体的な意志や意識・観念の領域とからなる心的現象の領域全般を「幻想」領域と呼ぶことにする。それは、外界に対する刺激－反応（受容）だけからなる知覚としてのみあるのではなく、身体的内部の無意識領域からくる錯誤や思い込みとも合わさったものとしてあるからである。

したがって、身体が自己疎外されるとともに、主観的＝主体的な意志や意識・観念が身体幻想（個体幻想、自己幻想）として自己疎外され、さらに身体と、「物質的自然」および「他者からなる世間」との間の関係が、関係意識と関係無意識とからなる関係幻想として自己疎外される<sup>\*16</sup>。

このような自己疎外は、たえず疎外の疎外を繰り返すものとしてある。それは不断の反省過程であり、不断の自己意識の否定の否定の運動である。そのようなものとして、それは特定の状態に限定されない「自由な意識」である。また同時に、対象に働きかける労働は、労働によって変化した対象にさらにまた働きかけることによって、不断の否定の否定の運動を行う。そ

れは、「生きた労働」としてのフローの活動が「死んだ労働」としてのストックを生み出し、「死んだ労働」としてのストックに制約されながら、「生きた労働」としてのフローが螺旋的に投下されていくという過程となる<sup>\*17</sup>。

このように、「世界＝内＝存在」という感覚的確信の内部においては、「物質的自然」と身体と精神の間に、根源的自己疎外としての原生的疎外とそれに含まれる純粹疎外が生起する。原生的疎外は身体と「物質的自然」に対して、同時に幻想領域を疎外する。

だが、身体は、「物質的自然」に対してだけでなく「他者からなる世間」に対しても自己疎外をしている。

まずはじめに立ち現れる他者は、何よりも血縁（擬似的であるかどうかはここでは問わない）的な親密性として現れる他者である。このような親密性の関係幻想を対幻想（家族幻想、親密性幻想）と呼ぶ。

しかし、他者との関係は、親子、兄弟姉妹からなる血縁的な親密性の中に自己完結していることはできない。それは、市民個人からなる市民社会や、商品所有者、貨幣所有者からなる市場、等々との関連の中へと広がっている。

つまり、家族は単婚家族を基本とする核家族としてあり、核家族の成員が平等に自由な個人としての市民として参加する市民社会はまずもって商品の需要者と供給者がネットワークを織りなす「欲求の体系」としてある。さらに、この「欲求の体系」を補完するものとして、諸個人の利害を調整する私法体系と司法制度からなる「悟性国家」があり、共同体的な中間組織（ポリツァイ、コルポラツィオン）、擬似的、想像的、幻想的な血縁共同体としての「理性国家」がある。

それぞれの関係のあり方に応じて、関係幻想のあり方も対幻想（家族幻想、親密性幻想）か

ら市場幻想（商品・貨幣・資本物神）、市民社会幻想、公共領域幻想、「理性国家」の共同幻想といったように変化する。それらは、たとえば、個体幻想を寄せ集めることによって家族幻想、市場幻想、市民社会幻想、共同幻想がそれぞれ成立するというのでもないし、また、個体幻想の寄せ集めが家族幻想であり、家族幻想の寄せ集めが共同幻想であるというような関係にあるのでもない。そうではなく、それぞれの関係幻想はそれぞれ別個のものとして存在している。それぞれの幻想領域は、それぞれに別個の自己完結的な関係幻想の世界を内的にもっているのである。

「世界＝内＝存在」における「世界」の現れは、このような広がりと同分化をそれ自体としてもっている。

## 第2項 「世界」の現れの時間性 — 歴史哲学

以上では、「世界＝内＝存在」における「世界」の現れが示す分節化された範疇構造を、いわばその空間的な構造として、それらが開示されてくるままに再構成してみたものである。

だが他面で、空間化された範疇構造は、それ自体、永久不変のものではなく、時間的な流れの中で生成、発展してきたものとしても現れてくる。（なお、ここでの時間性は「世界」の空間的構造の側に定位した時間性であり、ハイデッガーの現存在分析における根源的時間性に即して言えば、派生態としての通俗的時間性である。）

それは、<類の本質＝純粋疎外>の自己疎外としての「自由な意識」の不断の反省過程、不断の否定の否定の運動と、「生きた労働」としてのフローの活動が「死んだ労働」としてのストックを生み出し、「死んだ労働」としてのストックに制約されながら、「生きた労働」としてのフローが螺旋的に投下されていくという過

程（＝フロー・ストック・スパイラル）の所産である。

あるいは、ヘーゲルのいえば、絶対精神の労働による世界の産出の過程である。世界の産出過程としての世界史は、人間の自由な意識が自然との間で未分化なアフリカの段階、一人だけが自由な意識を専有するアジア的段階、自由民の間に自由な意識が芽生えるが共同体の中で幸福な調和を保っているギリシア的段階、共同体世界が解体し皇帝の強権とローマ私法だけによって束ねられ自由な意識は「疎外された不幸な意識」となっているローマ的段階、万人が自由な意識を享受するゲルマン的段階、というように類型化された。

しかし、これは、あくまでも論理的な類型論として理論的な意味をもつものである。つまり、これは「世界＝内＝存在」における観念内部において概念的に把握された世界史過程であって、「世界＝内＝存在」における現実の世界史過程そのものではない。前者が解釈枠組みとなって現実の世界史過程を解釈し類型化するのである。

これをマルクスに即してみると、マルクスが『経済学批判要綱』において経済学の論理的展開を媒介として『資本制生産に先行する諸形態』における歴史的な共同体の諸類型—アジア的、ローマ的、ゲルマン的—の分析を行っていることに対応する。まず理論的に導出される解釈枠組みとしての世界史過程の類型論が想定され、しかるのちに現実的な歴史過程の「死んだ事実の山」が解釈されるのである。この方法論的な意識は、『経済学批判序説』の「三 経済学の方法」において、歴史と論理の連関が一致するか否かは、「しかしながら、これらの単純な諸範疇もまた、具体的な諸範疇よりもまえに、独立の歴史的または自然的な実存をもたないであろうか？ それは時とばあいによる [Ça dépend]」として表現されていたものにはかな

らないであろう (Marx [1857-58]、邦訳頁数①52頁)。

また、同じことを宇野に即してみると、たしかに宇野自身は明確にしていないが、現実の世界史過程を「純粋化傾向」として分節化することは、商品経済、三大階級、自立的経済過程 (経済法則)、文明 = 市民社会の各範疇によって現実の歴史的過程を、①商品経済の全面化、②三大階級化、③自立化傾向、加うるに④文明化作用として分節化することを潜在的に行ったものということができよう。なお、この四つの歴史的傾向は、①は19世紀末以降も逆転せず分岐した面があるが、有機的に結びついた範疇であることはいうまでもないであろう。

したがって、宇野の主張は、①商品経済の全面化、②三大階級化、③自立化傾向、加うるに④文明化作用が、所与の範疇構成から遡行されてまず論理的な時間過程として想定され、それにもとづく解釈枠組みが「世界 = 内 = 存在」における現実の世界史過程にあてはめられることによって、「世界 = 内 = 存在」における現実の世界史過程それ自身がそのような解釈枠組みを与える範疇構成を形成してきたことが確認されるという認識方法論的な論理構造としてとらえ返すことができるのである\*18。

### 第3項 歴史哲学の部分化としての唯物史観

さて以上では、われわれは「世界」の空間化された範疇構造と、その時間的な生成過程の類型論的把握とについて考察してきた。そこでは、夫婦、親子、兄弟姉妹、市民、公民、商品所有者、貨幣所有者、等々と、抽象的人間が対自然的 - 対他的な労働によって労働生産物を産出し、それを獲得して生存を維持する過程が、最も基礎的な範疇構造として分節化された。

それとともに、労働と生産の主體的な実践活

動を可能とする対自然的 - 対他的な協働連関としての社会的諸関係を、対自然的な契機において「生産力」、対他的な契機において「生産関係」として分節化し範疇化する論理的必然性もたらされるのである。

生産諸力と生産諸関係が織りなす「経済的下部構造」は、受動的 - 能動的な主体の関係幻想の特定のあり方によって諸個体が連結されたものでもある。この関係幻想の特定のあり方が、「観念的上部構造」を形成する。経済的下部構造と観念的上部構造の全体が、一つの「社会構成」をかたちづくる。

中期マルクスが定式化した唯物史観の諸範疇は、ヘーゲル、初期マルクスの家族 - 市民社会 - 政治的国家の図式において定式化された、空間化された範疇構造が歴史哲学的に時間化されたときに、その展開動力となる意識と労働の自己疎外過程としてのフロー・ストック・スパイラルのあり方に着目して、そこから抽象的な諸範疇として、生産力、生産関係、経済的下部構造、観念的上部構造、社会構成などが抽出されたものなのである。

このように、意識と労働の自己疎外過程としてのフロー・ストック・スパイラルの展開過程は、中期マルクスによって、生産力が発展し生産関係が桎梏となると、観念的上部構造を媒介とした社会構成そのものの変革が起こるといように表現された。しかし、もちろん、このような表現は、フロー・ストック・スパイラルの中からそのごく一断面をとらえて言い表したものにすぎず不十分なものであったといわざるをえない。このことは、本稿の冒頭においてもごく概略的に述べた通りである。

つまり、生産力、生産関係を中心概念とする唯物史観は、人間の活動の全範囲を対象とする歴史哲学的な範疇体系からみれば、ごく部分的なものにすぎないわけである\*19。

#### 第 4 項 純粹化傾向による唯物史観の諸範疇の現象学的示現

以上でわれわれは、現れの地平においてまずもって現れてくる「世界」は、つねにすでに、夫婦、親子、兄弟姉妹からなる家族関係、市民個人からなる市民社会、商品所有者、貨幣所有者からなる市場、等々として分節化されてくるものであり、このような「世界」の分節化は、「世界＝内＝存在」にとって、それ自体で範疇の純粹形態を与えるものとして現れてくることをみてきた。

これは、現象学的還元から始まって、まず空間化された範疇構造が開示され、次いで、空間化された範疇構造の時間的な生成過程としてのさしあたりは抽象的・論理的なだけの歴史哲学的展開過程として開示された。そこにおいて、論理的な世界史過程の原動力としての受動的－能動的な主体が展開するフロー・ストック・スパイラルの過程は、生産力、生産関係、経済的下部構造、観念的上部構造、社会構成などからなる唯物史観的な諸範疇へと分節化されることをみてきたわけである。

とはいえ、しかし、現れの地平においてまずもって現れてくる「世界」が、このような特定の範疇構造をもって現れることは、言語化された概念を媒介とした所与として開示されるものではあるが、必ずしも自明のことではない。「世界」を「内＝存在」が認識し分節化するにあたって、他の様々なやり方も可能である。

ただし、他の様々なやり方においては、マックス・ヴェーバーの主観的問題関心による理念型の構成のように、「内＝存在」の側が主観的、能動的、恣意的に「世界」を分節化するという作用が必要になる。事実、フッサールは極めて抽象的な「生活世界」をみいだしたにすぎない。ハイデッガーは、より具体性のあるかたちで「世界＝内＝存在」の「世界性」を有意義な

道具連関としたが、それは<ダス・マン>という概念にみられるように、いわばワイマール期ドイツの大衆社会状況から無批判的に抽象された没歴史的な社会構成の表象でしかなかった。

それらに対して、「世界」それ自体の分節化された範疇構造が所与の開示されるがままの状態で見えてくるところでとらえられたものが、唯物史観と経済学的諸範疇である。

家族－市民社会－政治的国家という範疇構造、「欲求の体系」における商品・貨幣、資本といった諸範疇、生産力・生産関係といった諸範疇は、時間化された「世界」の産出過程それ自体によって純粹化されてきたものとして「世界＝内＝存在」に開示されるものなのであり、それらの諸範疇は、現象学的な示現のままに与えられるものなのである。

#### [注]

- \*1 まず、生産力・生産関係と同時に、生産主体がまさには生産力・生産関係と同時的な関係的存在、いわば対他の－対自然的な協働連関としての能動的主体として一措定される必要がある。また、この生産主体は、同時に観念的、イデオロギー的、幻想的な諸領域を孕むところの非生産的の主体でもある。そのことは、同時に生産力・生産関係としての対他の－対自然的な協働連関にとどまらず、対他の－対自然的という契機に加えて対内面的－対超越的な契機をも合わせた、非生産的な観念的、イデオロギー的、幻想的な諸領域を孕むものでもあるということである。
- \*2 「形成途上にある新しい科学と、科学が生い立つ『地盤』を占拠する前科学的な理論的イデオロギー」とをわかつ「認識論上の切断」によって、「われわれはマルクスが新しい科学、すなわち『社会構成体』の歴史科学を建設したことを断言できる。」(Althusser, Louis [1965], Pour Marx, La Decouverte/Maspero. アルチュセール [1994年]『マルクスのために』河野健二・田村俣・西川長夫訳、平凡社ライブラリー、18頁)。しかし、アルチュセールにおいては、形成史的に何がマルクスに「認識論上の切断」を

- もたらしたかも、「認識論上の切断」によってもたらされた新たな諸範疇の導出が論理的にどのように根拠づけられるかも不明なままである。
- \*3 『ドイツ・イデオロギー』における当該箇所  
の読解には、花崎皋平 [1968年/1972年]『増補改訂 マルクスにおける科学と哲学』79頁、  
から示唆を受けた。ただし、全体の論旨は必ずしもその限りではない。
- \*4 Hegel, [1821], *Grundlinien der Philosophie des Rechts*. ヘーゲル『法の哲学』藤野渉・赤澤正敏訳、岩崎武雄・責任編集『世界の名著 35 ヘーゲル』中央公論社、1967年、所収、参照。
- \*5 ただし、マルクスはなぜか終始、「市民社会」とその一構成要素である「欲求の体系」とを混同し、「市民社会」そのものを「歴史の寵」ととらえていた。
- \*6 廣松渉 [1968年]『エンゲルス論』が克明に解き明かしたように、唯物史観の形成過程におけるエンゲルスの主導性をめぐっては一国民経済学への批判的研究、共産主義運動への実践的関与とともに一疑問の余地はないところであろう。ただし、廣松のように、近代主客二元論の地平を超克する共同主観性、関係主義の地平への哲学的なパラダイム・チェンジまでも含めてエンゲルスが主導したということについては、牽強付会にすぎない議論といわざるをえないであろう。この点については、新田滋 [2012年]「吉本隆明のカール・マルクス論」(『情況』第4期、2012年11・12月合併号)の「第二章 廣松渉の自己疎外論批判について」、とりわけその「シュティルナー・ショックとエンゲルス主導説について」という節において詳細に明らかにしているのを併せて参照されたい。マルクスは“シュティルナー・ショック”や『ドイツ・イデオロギー』執筆過程におけるエンゲルスからの刺激以前から、ヘーゲル哲学そのものによって関係主義的な了解をもっていたのは明らかである。また他方で、廣松自身が強調していることは、マックス・シュティルナーのような唯名論の水準を超克して、真に哲学的パラダイム・チェンジを果たしたと論定できるのは『資本論』の価値形態論においてであったということなのである。いずれにせよ、こと哲学の方面に関するかぎり、晩年に『反デューリング論』、『フォイエルバッハ論』、『自然弁証法』においてその哲学的センスを遺憾なく披瀝しているエンゲルスの主導性が、若い一時期にだけはありえたなどということは、相当に無理のある推論であろう。
- \*7 なお、「交通形態」等は、『ドイツ・イデオロギー』の執筆過程で「生産関係」とされるようになっていったと考証されている。「[436頁]この[史的唯物論の]“公式”と比べると『ドイツ・イデオロギー』のウアテキストには、まだ……生産関係、社会構成体、といったタームの確定がみられず、その代りに、交通形態、交通諸関係、協働関係、“市民社会”、生産力と交通の総体、等々の用語が不安定に用いられている」(廣松渉 [1968年]『エンゲルス論』。引用頁数は、ちくま学芸文庫、1994年、による。)
- \*8 マルクスにおけるゲゼルシャフト *Gesellschaft*、ゲマインシャフト *Gemeinschaft*、ゲマインヴェーゼン *Gemeinwesen*、ゲマインデ *Gemeinde*の厳密な使い分けについては、望月清司 [1973年]『マルクスの歴史理論』岩波書店、278頁、参照。
- \*9 『経済学批判序説』の段階ではマルクスは、下向的分析の帰結として得られた最も単純で抽象的な概念は、「分業、貨幣、価値などのような、いくつかの規定的な抽象的一般の諸関連」としていて、商品としてはいないことに注意する必要がある。『資本論』のように商品を起点とすることが果たして論理必然的な決定版といってよいかどうかには疑問の余地があるからである。廣松渉 [1987年]「貨幣と信約的行為」(『廣松渉コレクション 第4巻』43頁。『廣松渉著作集 第13巻』380頁)では、「交換取引」という関係態のほうから反照的に「関係項」たる「商品」なるものを規定し返す方法を示唆しているが、検討に値する着想であろう。
- \*10 なお、宇野は、上向法の到達点は現状分析的な現代の現実世界ではなく、あくまでも純粹資本主義社会であるとして、マルクスによる上向法の説明の仕方に関し一定の留保を加えている。「[28頁] なおまたマルクスのいう上向の道は、理論的展開をもってしては、必ず純粹の資本主義社会を構成するよりほかないのであって、下向の出発点をなした現実の資本主義社会をそのままに再構成しうるわけではない。特定の時代の特定の国の現実から出発して、基本的な規定が抽象的にえられるという場合に、特定の時代も、特定の国も、ともに捨象されざるをえない。したがってまた上向の論理は、この特定の時代や、特定の国を再び取り入れるということではできないのである。この点は後に述べるように原理的規定の展開で直ちに現状の分析が行われる

わけではないことを示すものである。」(宇野 [1962年]『経済学方法論』「I-3 理論経済学の対象としての資本主義社会」。引用頁数は著作集第9巻による。)

- \*11 宇野弘蔵のいう「純粋化傾向」は、①「労働力の商品化」にもとづく全社会の商品経済化あるいは商品経済の全面化、②資本家・土地所有者・賃労働者からなる三大階級化、③周期的恐慌による資本蓄積の自立化にもとづく経済的  
下部構造の自立化(それを表現するものとしての経済政策の自由化)、等々といった諸内容をもっている。しかし、これらの中で、①は「鈍化」することなく進行し続けていた。歴史的な傾向が「逆転」したと明確にいえるのは③の自立化傾向だけである。したがって、厳密に言えば、宇野の三段階論、方法模写説を論理的に根拠づけることができるのは、③の自立化傾向だけである。新田 [1998年]、39-41頁、参照。他方、黒田寛一 [1962年/1992年]と同時期に公刊された鈴木鴻一郎編 [1962年]『経済学原理論』は、岩田弘によって主導的に唱えられた内面化論=内面模写説をもって、宇野の純粋化論=方法模写説を批判するものであった。内面模写説は、商品経済の価格関係のうちに非資本主義的生産が内面化されることによって、現実の世界資本主義は原理論へと内面的に模写されるとするものである。それは、時間軸に沿って純粋化傾向を延長することによってではなく、空間軸に沿って非資本主義的市場経済を市場経済の価格関係のうちに還元することによって、純粋資本主義世界が構成できるという考え方である。たしかに時間軸に沿って純粋化傾向を延長する、という操作には、主観的な想像力が入ってくる。それに対して、空間軸に沿って非資本主義的市場経済を市場経済の価格関係のうちに還元するだけならば、その余地はなくなる。ただ、内面化作用によって翻訳、還元された像を模写すればよいことになる。ただ、この考え方の欠陥は、資本主義的市場経済ではなく商品と貨幣の交易だけからなるたんなる市場経済であっても、非資本主義的生産との交易によってそれを価格関係に内面化できてしまうということである。つまり、内面化の論理だけでは、それが産業資本的蓄積様式による自立的な資本主義世界の像を模写することを保証できないのである。そこには、産業資本的蓄積の自立化傾向、すなわち純粋化傾向そのものが必須の条件となっているといわなければならない。つまり、内

面化論だけでは方法論として自立できないのであって、それはあくまでも純粋化傾向論・方法模写説の補完として理論的意義をもつものである。

- \*12 宇野が「方法模写説」において示している唯物論哲学の「模写説」的な理解の限界、また、「模写説」としても論理的に成功しているとはいえないという問題、他方でヒューム、ポパーが問題にした科学哲学上の問題には独特の回答を与えているという問題など、「方法模写説」をめぐる論点は本稿で取り上げる論脈以外にも多くある。それらの諸点については、新田 [1998年]、45-46頁、参照。
- \*13 「[272頁] ……私のような哲学畑の人間から言いますと、この『三段階論』というのが、経済学にとって必然的な『方法論』(Methodenlehre)なのか、それとも、ひとつの『手続き』(Verfahren)として“こういう議論の進め方をした方がいい”ということなのか、必ずしもはっきりしない。」「[281頁] ……『三段階論』が『手続き』としてはわかる。けれど、しかし科学方法論的にみて果たして必然性があるのだろうかという言い方をしましたが、哲学屋は、どうしても前世紀の終わりから今世紀の始めにかけて盛んだったいわゆる科学方法論とか、Methodenlehreとかを頭の片隅に置いて『三段階論』に臨むので、……そういうモノサシでみますと、正直なところ宇野先生の議論はアイマイなところが多すぎてどうも釈然としない。」(廣松渉 [1977年]「宇野経済学方法論をめぐる問題点」。引用頁数は『廣松渉著作集第13巻』による。)ただし廣松は、唯物史観は「言ってみれば世界観的なオーダーのもの」であり、「経済学によって『論証』できるというような、そういうオーダーのものではない」として、弁証法的な円環的展開の全体を通じて“権利づける”*rechtfertigen*べきものとしている(同前、285-286頁)。この点では、廣松にはバリバールのような問題意識すらなかったことになる。
- \*14 木田元 [1974年] 422頁、参照。
- \*15 本稿の課題と関連性があるのは『存在と時間』第一編における現存在分析までであるが、第二編の「現存在と時間性」では第一編を受けて、そこにまず《死》をもってくることによって現存在の全体性を《死への存在》とし(第一章)、次に《死》をもってくる根拠づけとして《Sorgeの声としての良心の声-(非全体的存在への)責》を措定し(第二章)、《先駆的決意性

- 時間性》として《Sorge》の存在論的意味（現存在の全体性における）を規定（第三章）、以下、《時間性》と《日常性》《歴史性》《通俗的時間概念の根源としての内部時間性》の相互関連に説き及ぶ（第四～六章）。なお、ハイデッガーとマルクスの比較考察については、廣松渉 [1968年a]、新田滋 [1989年] も参照されたい。
- \*16 新田滋 [2012年a]・[2013年]・[2014年] 参照。
  - \*17 フロー・ストック・スパイラルの概念については、新田滋 [2006年] 参照。
  - \*18 このような歴史的諸傾向を一言で「純粋化傾向」と呼んでしまうと、「純粋化傾向」の極限に原理論的な純粋資本主義社会が想定されるのか、原理論で想定される純粋資本主義社会が純化・不純化の基準となっているのか、あたかも悪循環のように思えることになる。宇野弘蔵・梅本克己 [1976年]『社会科学と弁証法』における梅本発言（57頁）、重田澄男 [2010年]『再論 資本主義の発見—マルクスと宇野弘蔵』174頁、などを参照。だが、論理的展開の順序としては、主観的恣意による理念型の構成によらずとも、何びとにも共有されうる純粋な諸範疇がすでに与えられているということが出発点としてあって、この諸範疇を形成してきた歴史的傾向をもって、事後的に「純粋化傾向」と名付けたということにすぎない。したがって、悪循環とみえる問題はたんに、このような歴史的諸傾向を「純粋化傾向」と呼ばなければ解消するような擬似問題にすぎない。
  - \*19 すでにみたように、バリバールらアルチュセール学派は、ヘーゲル法哲学・歴史哲学、初期マルクスの市民社会—国家論の諸範疇と、唯物史観の諸範疇のあいだに「認識論的切断」を強調していたが、それは誤りである。そもそも、イギリス古典経済学とその影響下にあったヘーゲル「欲求の体系」論や、初期マルクスの「市民社会＝歴史の竈」論は、「純粋化傾向」による経済学および唯物史観的な諸範疇の形成過程に連なるものであったと考えられるべきである。また同時に、唯物史観と経済学は、法哲学・歴史哲学、市民社会—国家論の全体系性からすればごく部分的なものでしかないのであり、唯物史観における諸範疇の分節構造を基準としながら、その総体的な再構築が図られるべきものと考えられるのである。

## [参考文献]

- 宇野弘蔵 [1955年]「帝国主義論の方法について」、初出『思想』1955年11月号、『資本論』と社会主義 岩波書店、1958年、『宇野弘蔵著作集 第10巻』岩波書店、1974年、所収。引用頁数は『宇野弘蔵著作集 第10巻』による。
- 宇野弘蔵 [1962年]『経済学方法論』東京大学出版会、『宇野弘蔵著作集 第9巻』岩波書店、1974年、所収。引用頁数は『宇野弘蔵著作集 第9巻』による。
- 宇野弘蔵・梅本克己 [1976年]『社会科学と弁証法』岩波書店。初出『思想』1966年2月号。引用頁数は宇野・梅本 [1976年]による。
- 木田元 [1974年]「訳者解説」、フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳、中央公論社、1974年、所収
- 黒田寛一 [1962年／1992年]『宇野弘蔵経済学方法論批判』こぶし書房
- 重田澄男 [2010年]『再論 資本主義の発見—マルクスと宇野弘蔵』桜井書店
- 新田滋 [1989年]「現象学的還元といわゆる唯物史観について」『オルガン』第8号、1989年12月、新田滋 [2001年]『恐慌と秩序—マルクス<資本論>と現代思想—』情況出版、所収。
- 新田滋 [1998年]『段階論の研究』御茶の水書房
- 新田滋 [2006年]「市場経済を読み解く方法としてのフロー・ストック・スパイラル—市場・制度の発生・進化モデルの要約表現—」、SGCIME編『現代マルクス経済学のフロンティア』[マルクス経済学の現代的課題・第II集 現代資本主義の変容と資本主義 第3巻] 御茶の水書房
- 新田滋 [2012年a]「幻想疎外論の革命性—吉本隆明のために」、『流砂』第5号、批評社
- 新田滋 [2012年b]「吉本隆明のカール・マルクス論」『情況』第4期、2012年11・12月合併号
- 新田滋 [2013年]「吉本隆明の哲学的思考」、『流砂』第6号、批評社
- 新田滋 [2014年]「吉本隆明の哲学的思考（二）」、『流砂』第7号
- 花崎皋平 [1968年/1972年]『増補改訂 マルクスにおける科学と哲学』社会思想社
- 廣松渉 [1968年a]『エンゲルス論』盛田書店、ちくま学芸文庫、1994年、『廣松渉著作集 第9巻』岩波書店、1997年、所収。引用頁数は、ちくま学芸文庫、1994年、による。
- 廣松渉 [1968年b]「近代」思想の地平を超える

- もの」、初出『現代の理論』1968年7月号、廣松渉『マルクス主義の地平』勁草書房、1969年、講談社学術文庫、1991年、『廣松渉著作集 第10巻』岩波書店、所収。引用頁数は『廣松渉著作集 第10巻』による。
- 廣松渉 [1977年]「宇野経済学方法論をめぐる問題点」、初出『大阪市立大学新聞』1977年8月10日号・22日号。『廣松渉コレクション 第4巻』情況出版、1995年、『廣松渉著作集 第13巻』岩波書店、1996年、所収。引用頁数は『廣松渉著作集 第13巻』による。
- 廣松渉 [1987年]「貨幣と信約的行為」（初出『現代思想』1987年8月号、『廣松渉コレクション 第4巻』情況出版、1995年、所収。『廣松渉著作集 第13巻』岩波書店、1996年、所収。引用頁数は『廣松渉著作集 第13巻』による。
- 望月清司 [1973年]『マルクスの歴史理論』岩波書店
- 吉本隆明 [1965年]「自立の思想的拠点」、初出『展望』第75号、1965年3月号、『自立の思想的拠点』徳間書店、1966年、『吉本隆明全著作集13』、勁草書房、1969年、所収。引用頁数は『吉本隆明全著作集13』による。
- Althusser, [1965], Pour Marx, La Decouverte/Maspero. アルチュセール [1994年]『マルクスのために』河野健二・田村俣・西川長夫訳、平凡社ライブラリー。引用頁数は邦訳による。
- Balibar, [1965], Sur les concepts fondamentaux du materialisme historique, Althusser, Balibar [1965], Lire le Capital, tome II, Francois Maspero. バリバル「史的唯物論の根本概念について」、アルチュセール/ランシエール/マシュレー/バリバル/エスタブレ [一九九七年]『資本論を読む』今村仁司訳、ちくま学芸文庫、下巻。引用頁数は邦訳による。
- Heidegger, [1927], Sein und Zeit. ハイデッガー『存在と時間』細谷貞雄訳、ハイデッガー選集 第16巻、理想社、1963年。ちくま学芸文庫、1994年、上巻。引用頁数は原著頁数による。
- Hegel, [1821], Grundlinien der Philosophie des Rechts. ヘーゲル『法の哲学』藤野渉・赤澤正敏訳、岩崎武雄・責任編集『世界の名著 35 ヘーゲル』中央公論社、1967年。引用頁数は邦訳による。
- Husserl, E. [1935/1936], Die Krisis der europäischen Wissenschaftlichen und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie. フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳、中央公論社、1974年。引用頁数は邦訳による。
- Marx, Karl / Engels, Friedrich [1845-46], Die Deutsche Ideologie. 花崎皋平訳『新版 ドイツ・イデオロギー』合同新書、1966年、マルクス／エンゲルス『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』廣松渉編訳／小林昌人補訳、岩波文庫、2002年、新訳刊行委員会『新訳 ドイツ・イデオロギー <マルクス主義原典ライブラリー>』現代文化研究所、2000年、その他多数の編集案と邦訳がある。引用に際しては、特定の邦訳にのみ依拠せず、また、既存の邦訳によっていない場合もある。
- Marx, Karl, [1857/58], Ökonomische Manuskripte 1857/58; Teil 1-2, KARL MARX, FRIEDRICH ENGELS: GESAMTAUSGABE (MEGA), 2. Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten, Band 1-2, Dietz Verlag, Berlin, 1976. 『経済学批判要綱』、『資本論草稿集①-②』1981年、大月書店、所収。引用頁数は邦訳による。
- Marx, Karl, [1857-58], Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Dietz Verlag, Berlin. 1953, Berlin. マルクス『経済学批判要綱 I』高木幸二郎監訳、大月書店、1958年。
- Marx, Karl [1859], Zur Kritik der politischen Ökonomie, MEW, Band 13, Dietz Verlag, Berlin. 『経済学批判』武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳、岩波文庫、1956年。向坂逸郎訳、『マルクス・エンゲルス選集』第7巻、新潮社、1959年。杉本俊朗訳、『マルクス・エンゲルス全集』第13巻、大月書店、1964年。引用に際しては、特定の邦訳にのみ依拠せず、また、既存の邦訳によっていない場合もある。
- Marx, Karl, [1867/73/85/94], Das Kapital, I, -III, MEW, Band 23-25, 1962, Dietz Verlag, Berlin. 『資本論』からの引用は、引用文中に Karl Marx [1962], Das Kapital, I, -III, MEW, , Band 23-25, Dietz Verlag, Berlin. の原著頁数を [S.54] のように示し、文末括弧内に『資本論』第一巻第一章等と記すこととする。引用に際しては、特定の邦訳にのみ依拠せず、また、既存の邦訳によっていない場合もある。